

「フランシスコ教皇の訪日」

2019年11月27日

フランシスコ教皇が訪日した。訪日前から、新聞、テレビで、私の読む新聞や諸雑誌にも、大きく教皇の姿勢やメッセージが報道、掲載されていた。彼が教皇になった後、『教皇フランシスコ キリストとともに燃えて 偉大なる改革者の人と思想』（O・アイヴァリー著）という大部の本が出た。幼い頃から教皇に選ばれるまでの人となり、思想、信仰が形成される道筋を克明に追った著作で、感銘を受けた。教皇はイタリアからアルゼンチンに移民したベルゴリオ一家の両親の長男として生まれ、少年時代はブエノスアイレスで過ごし、活発で明るい少年だった。貧しい生活環境から、貧困、移民・難民問題に関心を持たざるを得なかった。神父として献身していったが、必然的に社会的弱者と環境を守ることが大きなテーマになっていった。神父になるためには、プロテスタントの牧師になるのに比べると、とてつもない厳しい訓練であることを知らされた。彼はアルゼンチンの教会で、貧しく、疎外されている人々と共にある「平和の人」としての司牧を貫いた。

第265代教皇ベネディクト16世は、教皇の終身制を破って、健康上の理由で退位すると表明し、引退した。枢機卿たちはコンクラベ（教皇選出）で、ベルゴリオを選んだ。カトリック教会は彼を教皇にし、「貧しい人たちのための教会」を目指したのであろう。時代の要請を思われる。教皇に選ばれた時、ベルゴリオ枢機卿はフランシスコ教皇と名乗った。彼はイエズス会に所属しているにもかかわらず、清貧と平和の思想で知られたアッシジの聖フランシスコの名をもらい、彼の信仰に倣おうとしたのである。

ローマの教皇は13億人のカトリック教徒の頂点に立つ人であるから、視点はグローバルである。現在の経済・金融システムは人を殺すと明言し、多国籍企業による搾取は弱者への暴力であると訴えている。2015年に出された『回勅』では、環境問題や気候変動について、地球環境の荒廃は「見捨てられ虐げられた貧しい人々」の苦しみを増幅し、環境破壊は弱者への暴力であると述べている。水道の民営化が問題になっているが、市場の法則によって私有化することは、貧しい人々の命を直撃すると警告している。「命の神学」を唱え、死刑廃止も強く訴えている。新自由主義経済への懐疑、格差拡大への批判、難民保護、死刑廃止など、社会的弱者からの視点は、自国の経済的発展のためには、人間の尊厳を傷つけても構わないとする現代政治のあり方に対し、強く「人権と平和」を主張している。

ベルゴリオは子どもの頃、広島、長崎の原爆被害の実態を知り、司祭になってから、日本宣教を目指したこともあったそうである。今回、訪日を実現した訳で、教皇の思い入れも深いものがあつただろう。長崎では下記のような主張をされた。核兵器や大量破壊兵器は平和と安定をもたらさない。武器は日ごとに破壊的になり、とてつもないテロ行為だ。核廃絶は核保有、非保有にかかわらず、全ての人、国、機関の参加が必要だ。核兵器は国際的、また国家の安全保障の脅威から守ってくれるものではない。核兵器禁止条約を含めた核軍縮と核不拡散に関する国際法の原則を整えるべきだ。広島の講演は下記のような要旨であった。広島を訪れる義務を感じていたが、生き延びた方々の強さと誇りに深く敬意を表す。原子力の戦争目的の使用は倫理に反する。次の世代が私たちの失態を裁く裁判官として立ち上がるだろう。核兵器の脅威で威嚇しながら、どうして平和を提案できるか。真の平和は非武装以外にあり得ない。歴史から学び、広島の出来事を忘れてはならない。犠牲者たちの名により、戦争はいらぬ、兵器の轟音はいらぬと叫ぼう。被爆地からの教皇のメッセージは被爆者だけでなく、多くの人々の心を打った。核兵器廃絶決議案を提出しながら、核兵器禁止条約に賛同しない安倍政権にもしかと聞いてもらいたいものだ。